

今年60周年を迎える 知財にゆかりのあるもの

ペコちゃん

不二家の店頭人形としてデビュー、60年経っても6歳のまま

不二家のマスコットであるペコちゃんも今年60周年を迎えます。ペコちゃんは1950年(昭和25年)に、不二家の店頭人形としてデビュー。夢の国からやってきた永遠に6歳の女の子です。身長は100cm。

ペコちゃんは1951年(昭和26年)のミルクの発売と同時にデビュー。ペコちゃんのボーイフレンド、ペコちゃんよりも1歳年上の7歳、身長はペコちゃんと同じ100cmです。

ペコちゃんはもともとミルクの販売促進キャラクターとして社内であたためられていましたが、ミルク発売の前の年(ミルク発売は昭和26年です)に店頭人形として作られたのが最初のデビューとなりました。最初は紙の張子製の人形(下写真左)だったのが、昭和35年頃よりプラスチック製の人形になっています。



昭和20年代末から30年代初頭 ©FUJIYA CO.,LTD.



現在 ©FUJIYA CO.,LTD.

また、1998年には立体商標登録第1号(登録第4157614号)として登録されています。

ポコちゃんは、女の子のペコちゃんがいるなら男の子もということで作られたようです。ペコちゃんポコちゃんとも不二家のキャラクターです。二人のなかよしの仔犬は1995年に誕生したキャラクターで、通称Dogと呼ばれています(特定の名前はありません)。



〈Dog(犬)〉ペコちゃん、ポコちゃんの友達。オスの仔犬(中央)。©FUJIYA CO.,LTD.

参照：
不二家ウェブサイト
<http://www.fujiya-peko.co.jp/>
ペコちゃんキャラクターサイト
「ペコワールド」
<http://www.pekoworld.jp>

名前の由来

ペコちゃんの名前は、子牛のことをさす愛称「ペこ」を西洋風にアレンジしたもの。

ポコちゃんの名前は、室町時代の古語で「幼児」をあらわす「ぼこ」を西洋風にアレンジしたものです。

ペコちゃんは どうして舌を出しているの？

子供のかわいらしさを表すため、またはいつもおいしいお菓子食べているからなどいろいろな説がありますが、舌の向きはポーズにより異なりますが、店頭ペコちゃん人形は向かって左=ペコちゃん自身の右のほっぺに舌を出しています。ポコちゃんは舌は出していません。

スヌーピー

作者亡き後も愛され続ける、世界で一番有名なビーグル犬

子どもからお年寄りまで広く人気がある、世界で一番有名なビーグル犬、スヌーピーと「ピーナッツ」の仲間達も、今年で60周年になります。そして、現在まで親しまれるコミック・キャラクターであることは皆さんもご存じの通りです。

1950年10月2日に、アメリカの新聞7紙に「ピーナッツ」が掲載され、その翌々日の10月4日にスヌーピーは初登場します。ピーナッツは、かわいいキャラクター達とともに、その深いストーリーで人気を博しました。「ピーナッツ」に登場する、キャラクター、物語、いずれかに、自分と重なる部分を見つけることがあるのではないのでしょうか。

その人気はコミックにとどまらなかったようで、1957年にフォード社のファルコンのキャンペーンに使用されたり、1969年のアポロ10号の司令船と月着陸船の名前に、チャーリー・ブラウンとスヌーピーが採用されたり、「ピーナッツ」のアニメーションが何度もエミー賞を獲得したりしました。また、「ピーナッツ」に関連するキャラクターグッズがたくさんありますが、作者のチャールズ・シュルツ氏は、1994年にライセンシング業界での実績を認められ、ライセンシング業界各社連合会の殿堂入りを果たしたそうです。

作者のチャールズ・シュルツ氏は1999年の末に引退宣言をし、2000年2月12日に亡くなりますが、「ピーナッツ」は2000年1月3日には最後のデイリー版が、2月13日には最後の日曜日版が掲載され、「ピーナッツ」は長きにわたって連載されていました。シュルツ氏が亡くなった今でも、「ピーナッツ」が世界中で愛されていることは言うまでもありません。

参照：
スヌーピー公式サイト <http://www.snoopy.co.jp>

エスビー食品・赤缶カレー粉

「国産のカレー粉を自らの手で作る」という決意から誕生

2010年に発売60周年を迎えたエスビー食品の赤缶カレー粉は、みなさんの家庭にも1つはあるのではないのでしょうか。赤缶カレー粉の元となるカレー粉は、エスビー食品の創業者、山崎峯次郎氏によって生み出されました。エスビー食品の広報の方によれば、カレー粉は当時、輸入品だよりの状況で、日本にはカレーに関する情報も書物も資料も一切無かったそうです。カレーの魅力にとり付かれた山崎氏は、「国産のカレー粉を自らの手で作る」との決意のもと、インドに住んでいた老人から譲り受けたカレー粉の原料を吟味するなど、スパイスの種類を1つ1つ確定していくという気の遠くなるような作業を繰り返した結果、カレー粉の原料が日本で生薬として使われている植物であることを突き止め、基本となるスパイスを解明するに至ったとのこと。続いて、山崎氏はスパイス



発売当時の赤缶カレー粉



現在の赤缶カレー粉

の配合割合の問題も解決し、杵と臼による製粉、焙煎・熟成という工夫を重ねることで、個々のスパイスの個性を保ちながらもまとまりのある芳香を実現させ、現在の赤缶につながるカレー粉を誕生させたそうです。

ご覧のとおり、60年もの間、赤缶のデザインはほとんど変わっていません。また、その品質については、カレー粉は気候の影響を受けて風味が変化するスパイスを原料とするため、分析機器や感覚を駆使して予め分析を行い、スパイスの選定など風味が一定になるよう努力しているそうです。

カレーは今も変わらず愛され続ける国民食であり、それを支えるカレー粉は日本人の心を揺さぶる魔法の調味料といえるかもしれません。

(写真提供：エスビー食品株式会社)

テープレコーダー

手探りで開発をスタート、わずか1年で製品化

「テープレコーダー」、もの言う紙とも呼ばれたこの製品が、ソニー株式会社(当時、東京通信工業株式会社)から日本で初めて発売されたのは、1950年、今からちょうど60年前のことです。60年前といえば、まだ戦後間もなく、「テープレコーダー」自体アメリカでできたばかりのもので、参考書もほとんどありませんでした。そうした中、テープのベースや磁気材料を何にするか、紙テープへの磁性粉の塗布方法をどうするか、手探りで「テープレコーダー」の開発は進められていきました。磁性粉を得るための乾溜を、フライパンを使って行ったり、狸の胸毛の刷毛でテープに磁性材料を塗ったりと、試行錯誤をし、課題を一つずつ解決していきました。そして、開発をスタートしてからわずか1年という期間で、製品として日本初の「テープレコーダーG型」は発売されるに至りました。その翌年には、民生用の「H型テープレコーダー」も発売され、

視聴覚教育上でのレコーダーの使用方を説明するという普及活動により、テープレコーダーは全国の学校に広まり、普及していききました。

その後、テープは、オープンリール式からカセット式が一般的となり、ビデオでも「ビデオカセットプレーヤー」が発売されました。また、音楽を楽しむ新しいスタイルを生み出した、「パーソナルオーディオ」が世に出されたのは誰もが知るころです。

今では、MP3プレーヤーや携帯電話で、音楽を聴く人が多いかと思いますが。これを機に、テープで音楽を聴き、60年という時を感じてみてはいかがでしょう。

参照：ソニーウェブサイト「Sony History」

<http://www.sony.co.jp/SonyInfo/CorporateInfo/History/SonyHistory/>

ソニー歴史資料館

<http://www.sony.co.jp/SonyInfo/CorporateInfo/History/Museum/>



テープレコーダー



ビデオカセットプレーヤー



パーソナルオーディオ

写真提供：
ソニー株式会社

内視鏡

世界で初めての胃カメラは日本人が発明した

2010年は内視鏡が誕生してから60周年にあたります。今から60年前の1950年、世界で初めて胃カメラが発明されました。この世界初の偉業を成し遂げたのが実は日本人であることを、皆様は御存知だったでしょうか。

東京大学付属病院の外科医・宇治達郎氏と、オリンパス光学工業の杉浦睦夫氏、そしてその部下の深海正治氏の三人によって、世界初の胃カメラ開発（ガストロカメラ）という偉業が1950年に達成されました。なお、発明の名称を「腹腔内臓器撮影用写真機」とした特許もあります（特公昭26-5221号）。

現在では、カプセル型内視鏡など、最先端技術を駆使した様々な内視鏡が世界中で研究開発されています。この内視鏡の飛躍的な技術進歩から、60年という歳月の重みと長さを実感することができます。

endoscope



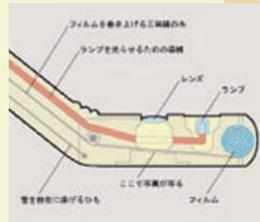
開発当初のガストロカメラ



カメラ部

〈参考文献・写真引用〉

「FUJITSU飛翔」No.36（1999年11月刊）



カメラ部の構造

Formula 1 World Championship

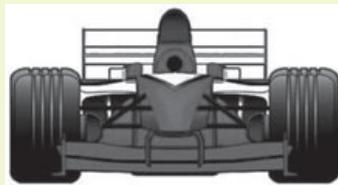
第1回のF1はイギリスのシルバーストン・サーキットで開催

国際自動車連盟(FIA)が開催するF1ワールドチャンピオンシップも60周年を迎えています。第1回F1ワールドチャンピオンシップは、1950年5月13日にイギリスのシルバーストンサーキットで開催をされました。この年のグランプリは“Grand Prix d'Europe”と名付けられ、モナコ、スイス、ベルギー、フランス、インディアナポリス500（米国開催、この時はインディ500*がF1の一つでした。）の7か所で開催されています。当時のF1マシンは、今のようなウィングもなく、1950年代前半はエンジンがフロントに搭載されていて、1950年代後半以降になって、エンジンがリアに搭載されるようになりました。日本のメーカーでは、ホンダ（1964年ドイツGP（13位）～1968年、1983年～1992年、2000年～2008年）、ヤマハ（1989年～1997年）、トヨタ（2002年～2009年）、ブリジストン（タイヤ供給で1997年～2010年）等が参戦しています。

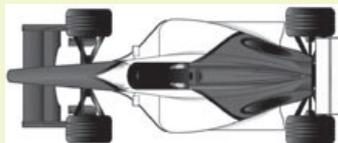
F1マシンに使われているデザインが日本の特許庁に意匠登録出願がされているのをみなさんご存じでしょうか？ 下の二つの図は意匠登録出願された昔（上）と最近（下）のデザインを並べたものです。昔のデザインを見ると冷却用エアインテークが車体の真ん中にあり、細長い葉巻のような形をしています。その後進化して現在ではエアインテークがドライバーの横にあり、車体の前後にダウンフォースを生み出すウィングが付いていることがわかります。興味のある方は是非IPDLでご覧下さい。



意匠登録第258472号（1964年出願）



意匠登録第1186019号（2001年出願）



※インディ500は、1911年に第1回が開催され、一時期F1レースの一つとなっていましたが、現在ではF1とは異なるインディーカーシリーズの一つとして開催されています。優勝賞金の金額（2010年は約275万ドル）と優勝者がミルクを飲むのは有名。毎年約40万人もの観客が観戦します。エンジンをスタートさせる際の「レディス・アンド・ジェントルマン・スタート・ユア・エンジン」も名物アナウンスとなっています。来年は100周年を迎えます。



第1回F1ワールドチャンピオンシップの様相（シルバーストンサーキット）©LAT